

幼 児 の 教 育

昭 和 五 十 二 年 二 月



わたしは、この繪を見た時、始めは何んの氣もなく見過ごさうとした。もう一度見直して、なんとなく氣をひかれた。更によく見てゐる中に、一種特別の微笑が込み上げて來るのを禁じられなくなつた。組の先生に、この子は見さんがあるのですかと聞いてみたら、そうですといふことである。わたしは、此の繪を、たゞの微笑だけでは見られないと思ひ出した。

颯はあけてこそ面白い遊びである。それをいつもノ、持ち役の方にばかり廻されてゐる此の子の心もちは……。といつて必ずしもそう不満といふ譯でもなく、これが妹の受持ちと思ひ、これが妹の颯遊びと思ひ、兄さんが、よく揚げればいゝと思ひ、おとなしく、颯をもち上げて、颯を待つてゐる心もちは……。何んといふ心理畫なのであらう。子ども繪にも、子どもらしいながら、こんなにも複雑な心持ちを描くものなのか。勿論小さい畫家自身それを意識してはゐまいが。

わたしは、もう一度この繪をみつめた。

(倉橋惣三)